熊本県人吉市とポルトガル共和国アブランテシュ市との新規姉妹都市提携を振り返って

平成２１年１１月
在ポルトガル日本国大使館　宮川雄一

この姉妹都市提携の動きは２００５年から始まり２００９年に実現に至ったものです。この間、原大使(当時)、三輪大使を中心に当館としても出来るお手伝いをし、実現を見守ってきました。その経緯をご紹介いたします。

１．「寛容の精神」、「青少年交流」

２００５年１１月ポルトガルに着任した原大使(当時)は、世界でテロや暴力が台頭している中、より安全で平和な世界・社会を築き上げていくためには、青少年達の水平線、地平線を押し広げ、より大きな「寛容の精神」を培うことが重要である、若い時から世界の異文化と接触し、異なったものの考え方、生き方を知ることが大切であり、そのためにも次世代による「青少年交流」を促進していきたいという強い意向を有していた。

青少年交流を柱とした日本ポルトガル間姉妹都市交流を促進すべく、当館よりポルトガルの自治体に日本の都市との新規姉妹都市提携を働きかけた結果、矢継ぎ早に８自治体から姉妹都市交流を希望するとの回答があった。幸先の良いスタートであり、提携は順調に進んでいくという期待感が生まれた。しかし、それは淡い思いであった。九州を中心としたポルトガルと歴史的繋がりのある都市、ポルトガル側と同規模の都市等に交流を打診したが、日本側自治体からは軒並み財政難を理由に否定的な回答が返ってきた。

２．旧友そして母校先輩からの賛同

熊本県人吉市の田中市長は原大使の熊本高校時代の同級生で、２００７年に市長に初当選したばかりであった。２００７年７月原大使より田中市長に宛てた姉妹都市交流を打診する書簡には、「青少年たちの、地平線、水平線を押し広げよう」と書かれてあった。昨今の公という義務が忘れられ自己中心的な考えが蔓延する現実に、日本の近未来を憂えていた田中市長はこの提案にいたく感動された。早速、田中市長より、ポルトガルの都市との姉妹都市提携を是非実現させたいとの回答が寄せられた。

さらに、ポルトガルに進出している有力日系企業の１つである三菱ふそうトラック・バス社の江頭会長(当時)がリスボンを訪問された際、原大使は同会長に対し、姉妹都市関係を通じた青少年交流の重要性を説明した。江頭会長はその意義を深く認め、そしてお世話になっているポルトガルに一企業として貢献したいと考えられた。同会長は早速帰国後に本件を社内で検討され、その結果、同社より日本ポルトガル姉妹都市間の青少年交流プログラムに対して資金的支援を行うことが決定された。これも何かの縁というべき全くの偶然であるが、江頭会長は原大使の母校の先輩であった。

こうして新規姉妹都市提携は、旧友そして母校先輩の賛同を得て本格的に動き出すこととなった。

３．ポルトガル候補都市の辞退、新たな提携先との「出会い」

姉妹都市提携に向けた人吉市内の調整も順調に進み、田中市長によりポルトガルへの事前調査団派遣が具体的に検討された。その矢先、ポルトガル側の候補都市より、諸般の事情により本提携を断念したい旨書簡にて通報があった。まさに青天の霹靂というべきこの突然の退場劇に関係者は困惑した。しかし、本件は高校時代の同級生である原大使と田中市長との絆と信頼で進められてきた

話しであり、このまま頓挫させるわけにはいかない。当館は新たな提携先を探し始めた。
　私(宮川)は、以前、三菱ふそうトラック・ヨーロッパ社の工場が所在するアブランテシュ市の市長が日本の都市との姉妹都市提携を望んでいるという話を思い出した。鋭意検討した結果、当館はアブランテシュ市が新たな提携先に相応しい都市と考え、姉妹都市提携について直接話をするためにアブランテシュ市のカルヴァーリョ市長を往訪した。当館よりカルヴァーリョ市長に対して、人吉市について説明すると共に、当初予定していた候補都市が辞退したことも正直に伝えた。カルヴァーリョ市長より、これまでの経緯は一切関係ない、人吉市は市の規模、自然環境などアブランテシュ市と共通点も多く、人吉市との提携を積極的に進めていきたい、人吉市の事前調査団が来るのであれば大歓迎であるとの心強い回答があった。その場に同席していた私は、これら一連の発言を聞いてカルヴァーリョ市長の侠気を感じ取った。

４．提携に向けた具体的な進展
　２００８年８月下旬、人吉市は副市長を団長とする事前調査団をアブランテシュ市に派遣した。アブランテシュ市は人吉市と同様に市のシンボルが城と川で、人口もほぼ同程度であり、また、全日程に亘りカルヴァーリョ市長が自ら案内役として同行するなど､同市長の熱意も目の当たりにし、事前調査団は大いに意を強くして帰途についた。さらに、同調査団訪問のわずか１ヶ月半後には、カルヴァーリョ市長を団長とするアブランテシュ市事前調査団が人吉市を答礼訪問した｡同訪問中、カルヴァーリョ市長一行は、田中市長を始めとする人吉市市民から熱烈な歓迎を受け、また、持参したポルトガル民族衣装を着用して地元の祭りに参加するなど、新規姉妹都市提携に向けた友好の気運は大いに盛り上がった。後は田中市長自らがアブランテシュ市を訪問し締結書に署名するのみである。その後両市は準備を進め、２００９年８月までにはアブランテシュ市にて締結を行うと共に、同締結に併せて人吉市の青少年をアブランテシュ市に派遣し第１回目の青少年交流を実施する予定となっていた。

５．市長の「友情」
　両市間で具体的な締結日程を詰めていた頃、世界中で新型インフルエンザが猛威を振るい始めていた。益々増加する感染者数、ポルトガルも決して例外ではなかった。ポルトガルに派遣する人吉市公式訪問団がインフルエンザに感染することも充分に想定され、また、もし青少年が新型インフルエンザに集団感染したとしたら・・・。田中市長は、悩まれたあげく、市政を司る立場の者として、そして特に大切な子供達を預かる身として軽率な行動は取れない、誠に残念だがここは慎重に対応する必要があると考え、公式訪問団及び青少年のアブランテシュ市訪問の延期を決断された。この連絡を受けた私は、延期したとしても今後直ぐにインフルエンザが収束するものでもなく、正直、この時点で両市の提携は難しくなったと感じた。また、縁がなかったのかなと半ば諦めの気持ちも心の片隅に湧いた。
　２００９年７月のある日、同年１０月に予定されていたアブランテシュ市長選挙にカルヴァーリョ市長は立候補せず今期限りで引退するとの報が私のところに飛び込んできた。これを人吉市に伝えたところ、その情報に接した田中市長は、本提携に向けて尽力してきたカルヴァーリョ市長在任中に何としてでも提携を実現させなければならないとの思いを強く抱き、市長選前にアブランテシュ市を訪問するという英断を下された。
　９月下旬、田中市長を団長とする公式訪問団は新規姉妹都市締結式に出席するためアブランテシュ市を訪問した。同締結式に列席した三輪大使が見守る中、両市長は締結書に署名し、この度の提携に漕ぎ着くこととなった。今回の提携はまさに両市長の熱き思い・友情の賜であり、２００９年

９月２４日、日本ポルトガル間８組目の姉妹都市関係が誕生した。

６．出会い、友情、未来

２０１０年は日本ポルトガル修好１５０周年であり、在ポルトガル日本大使館は三輪大使を中心に様々な記念事業を企画している。当館が作成した１５０周年記念ポスターのキーワードは「１５４３出会いEncontro、１８６０友情Amizade、２０１０未来Futuro」である。これは、１５４３年種子島にポルトガル人が到着し両国は出会い、１８６０年外交関係を樹立しお互いの友情を確認し合い、そして２０１０年は両国が新たな時代に向かって進んでいく未来志向の関係を表している。

姉妹都市提携を行うまでのこの期間は、まさに人吉市とアブランテシュ市にとって「出会い」、「友情」の２年間であった。現在、両市は２０１０年に青少年交流を実現すべく準備を進めている。次世代による青少年交流が１５０周年という記念すべき年に実施されることによって両国関係の新たな「未来」が始まる。

アブランテシュ市の子供達に歓迎される人吉市公式訪問団

姉妹都市締結書に署名した田中市長及びカルヴァーリョ市長

２０１０年日本ポルトガル修好１５０周年記念ポスター

（了）